

---

# 天高く、かぐわしきは金木犀～十四郎紫煙綴～

草紙屋本舗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天高く、かぐわしきは金木屋〜十四郎紫煙綴〜

### 【Nコード】

N36190

### 【作者名】

草紙屋本舗

### 【あらすじ】

草紙屋本舗、約二ヶ月ぶりの上梓であります。

今回はトッシーこと十四郎の恋愛成就話への序章です。

甘味は薄めですが、男味やや強めかつ、ちょっとスパイシーかも。

まあ、銀ちゃんに限っては甘いです。ところかまわず甘味特盛ですが。

こちらのストーリーを読んで、ぜひ次章へ…ささどうぞどうぞ！

ああ、またこの花の季節になりやがったんだな…

ふいつと煙草の煙を吹き上げる。煙が秋風に乗って、ふわりとゆらめく。その秋風から、ほのかに金木犀の香りがした。うつすらと紫煙がゆらめくを見ながら「俺がこうしてツと、煙にあんにやろめエがよくじゃれついていたっけな…」そんなことをついつい考え、ふと我に返る十四郎だ。

数年前の冬の日、道端で凍えていたまっ白い子猫を拾い、屯所に連れてきた。がりがりに痩せこけ、あまりに啼きすぎたのか抱き上げた十四郎の手の中で、掠れたなき声をあげていた。顔をのぞきこむと金色の瞳を泪でうるませながら、口を大きく開けて声にならぬ声でないた。

その必死の様相を見たら、もう寒空に置いていけなくなった。十四郎のぬくもりを頼みに一生懸命しがみついてくる白い小さな毛玉を「このままになんて…できやしねエツ」。そのままそつと懷に落として屯所に連れ帰ったのだ。

真選組の連中のほとんどが、痩せこけた白毛玉を一目見るなり「そう長くはもたんだろ…」と口々に言った。ならばむしる生き永らえさせてやろうよと、無理矢理山崎を巻き込んで、昼夜を問わず世話をした。そのかいあって、ちっちゃな毛玉はみるみるうちに元気になり、泪だらけのがり顔も可愛いまんまる形になり、子猫らしい愛嬌のある顔になった。そのうちいつちよまえの顔をして屯所内を歩き回るようになり、に、に、に、と小さくなき声をあげながらの“あんにやろめ”の闊歩は「白大将のお通り」と言われ、勲をはじめ周りの連中からずいぶんと可愛がられていたようだ。

冬の日はいじめて見た時の様子が、まっ白の毛に金色の目が花芯の

ように見えたから、と十四郎が白椿と名前をつけた。山崎が「ははあ…、ずんぶんとまた風流な名前をつけるんですね…」と冷やかすと、十四郎はフン…と鼻息をもらしながら「たまにはいいンじゃねエのか…俺ア、椿の花つてエやつが割と気に入ってンだよッ」と照れ隠しのように煙草をふかしたものだ。もつとも十四郎自身、普段は「白椿や…」などと呼ばず、もつばら「あんにやるめ！おいこら、あんにやるめエよ！」などと呼んではいたが…

その“あんにやるめ”が姿を消した。

一か月前から、姿が見えなくなつた。三日間くらいは、まあどこかに遊びに行っているんだろうよ…と呑気にかまえてもいられたが、一週間、十日と時を経るにつれて心配になってくる。手のあいている隊員が屯所敷地内をくまなく探しても、周辺もなめるように探しても見当たらない。まあ気が向いたらそのうち帰ってくるさ、と言いながら祈るような気持ちで餌椀に大好物を大盛りにして待っている日々だ。こうも音沙汰がないと、どんどんいやなことばかり想像してしまう。

ついさつきも、山崎が“あんにやるめ”の好きな高級鰹節を削りながら「猫つて死期が近づくと、姿を消すっていいですよね…」と言いかけ、はつと気付いたように口をつぐむものだから、それが癪に障りひどくこづいてしまった…

あんの大バカ野郎めが…ッ

余計なことを俺に聞かせんじゃねエ。ってか、うちのあんにやるめに限ってそんなわけねえしッ！俺に黙って、姿消すなんてありえねエッし！

あんにやるめえよ…早く帰ってこいや？

山崎がさつき超高級かつぶしをしこたま削ってたから、おめえの大好きなおまんまはすぐ喰えるしよ。

なんか気分悪いことがあったら、謝っから。とにかく帰ってこいや…

曇空に向かって、煙草をふかしていると、ついつい“あんにやるめ”に向かって呼びかけてしまっている十四郎なのだ。

ふたたび、ふいつと紫煙を吹きあげる。かすかな金木犀の香りに煙草の香りが混ざる。

他のことを考えようとしても、いつのまにか“あんにやるめ”のことを考えてしまっている自分に“…おいおい、どんだけ？ 想い人ですかっつ”と、思わず片頬だけの苦笑をもらす。やれやれ、と煙草を消そうとした途端、本部の方からこけつまろびつの態で、山崎がこちらに向かってくるのが目に入った。

「ふ、ふ、ふ、副ちよおおおおッ！」

尋常ではないその様子に内心びくりとしながらも、ゆっくり尋ねる。

「…おう、どしたアア？ なんぞ出入りでもあったのかよオ？」

「し、し、し、白があッ！」

“あんにやるめ”が？ いったいどうしたッ！

「おうッ！ あんにやるめエがどうしたッてンでイッ？」

よろめくように走りこんできた山崎の胸倉をぐいッとかみながら、尋ねる。

「ンぐウ！ ふ、副長ウ、ぐ、ぐるヂイ…！」

「おッ？ 悪い、悪い…！ って、いったいどうしたッてンでイ？ 早く言えッ！」

十四郎の手がゆるみ、喉元をさすりながら山崎が言葉を続けた。

「白が、白が戻ってきましたア！」

十四郎の口許がほころぶ。

「…そうか、戻ってきたかッ！ どこにいる？」

そんな十四郎に向かって、山崎が言いにくそうに何か言い淀んでいる。

「…なんだよ？なんか言いたいことあんなら、言えよ？」

「…いや、あの、白なんですけれども！」

「…おう、あんにやるめエが帰ってきたンだろ？」

「帰ってきたはきたんですけれども…」

煮え切らない話つぷりの山崎の様子に、十四郎が焦れて言い募る。  
「帰ってきたなら、いいじゃねエか！ああ？なんか問題でも、あンのかよオ？」

「…あのですね、白がですね、身ひとつじゃないっていつか…」  
「は？」

「こう、こうなつて帰ってきたわけです…」

山崎が両手を腹部の前で大きなまる状にし、御懷妊の様子を示す。

「え？なんだあ、それ…って？」

「白のやつ、外でこどもを仕込まれて帰ってきたんですってば！」

「…こ、こどもオオオオ？“あんにやるめ”がア？」

い、いつのまに？」

十四郎の唇から、ぽとりと吸いさしの煙草が落ちた。床に落ちた吸いがらをすかさず拾いながら、山崎が気の毒そうに言う。「白の腹つたら、ほんツとまんまるですて…」。

本部のソファアの脇で“あんにやるめ”は、まんまるのでつかい腹を重そうに抱えながら、うまそうにちゃむちゃむと音をたてて、皿からミルクを飲んでいた。十四郎の方などまるで見向きもしない。そして、その“あんにやるめ”の傍らには、見覚えのある男がどっかりソファアに座り込んでいた。

「はアアアアーい、まいどオ、万事屋でエエツす」

あいもかわらず死んだ魚のような目をした男が、こちらに向かってひらひらと手を振った。

「…てめツ、んなどこで何してイヤがんだよツ！」

「…もしもしイ？白椿様の命の恩人にたいして、なんですかア？何してるツてエ？」

ちよつとちよつとひどくなアい？その言い草。ありえないなアい？」

「…白の命の恩人だとおツ？なんだ、そりゃあツ！」

思わず傍らにいる山崎を振り返ると、山崎が酸っぱい顔をしてこくりと頷き、十四郎の耳に小声で、口早に告げた。

「ゆうべ、万事屋の旦那がお堀の近くを歩つてたら、道つぱたに倒れてたそうなんですよ、白が！」

「…！」

「首に綺麗な首輪をしてるってんで、飼猫だろうって。そんてまあ、そのまま万事屋に連れて帰ったら、万事屋の御新造さんが白だつて気付いたらしいんです」

「…だろうな」

なにしろ“あんにやるめ”の首輪は彼女のお手製。一目見て、わかるのは当然のことだ。

「で、一晩明けて旦那が連れてきてくださつた…ってわけです」

「……」

十四郎は無言で銀時を見返した。銀時も負けじとじいっとこちらを凝視する。

わかつている、わかつてはいるのだ。銀時に対して言わねばいけない一言が何かは、十四郎自身、よくわかつている。

…だが、こいつに限ってそれを言うのは、どうにもこうにも業腹で仕方ねえ…。

そんな思いがこみ上げる。

銀時から視線をそらさずにひたと見つめながら、煙草に火をつける。そんな意固地な様子の十四郎を見ながら、総悟がぼそと呟く。  
「…ったく。しのこの言つてねエで、さつさと言いなせイよ、御礼のことばを…」

「ああ？なんでてめエが、そこで知つた風な口をききやがんだア？」

「土方さんか、万事屋御新造さんかツつたら、断然あつしは御新造さん派なんでイ。ええ、こりゃ仕方ないンでさア…」

「つてか、てめエ、真選組だろうがよッ！何それッ？何その選択肢ッ？意味わかんねエンですけどッ！」

「まあまあまあ、痴話喧嘩は置いてエ……」

銀時の言葉に十四郎と総悟が同時に噛み付く。

「誰が痴話喧嘩じゃア、このやろうッ！」

「聞き捨てならねエですぜイ？今の言葉ア！」

ふたりの剣幕にびくりと背を震わせ、白椿が銀時の膝にかけのぼろろとする。そんな白椿をそっと抱き上げながら

「おう、よしよしイ、びっくりしちゃったニヤア？おっかなアい顔のマヨネーズバカと、頭からつぽのサド男がいつしよにおつきな声をあげたら、そりや吃驚しちゃうニヨね〜？おお、怖い怖い……」

そう言いながらニヤニヤ笑みを浮かべて、白椿をやわやわと撫でながら銀時が十四郎を見る。

「誰かに親切にしてもらったら、ちゃアアんと言つことがあるでしょうがア……がこの先生にも教わったでしょうが、ええ？」

「……うう。感謝してる……」

「はアアア？よく聞つこえないンですけどオオオ？」

「……てめッ、わざとだろ、それわざとやってンだろッ？」

「何イ？何言つてンのか、ほんと聞き取れないンですけどオ？」

「……白椿を見つけてくれて、ありがとよッ！」

「恩人に向かつて、その言い方はないンじゃないンですかア？タメ口ですか、タメロイ？」

「てンめエ、黙って聞いてりや図にのりやがつてエエッ」

「こののを助けてくださって、ありがとうございました、銀時様でしようがッ！」

「……ッ！ンなるオオオ、白椿を助けてくださって、ありがとうございました、銀時様アアッ！これで満足かアッ、万事屋アアッ！」  
十四郎の怒号をしれつとした顔で聞き流しながら銀時が、総悟に話しかける。

「とはいうものの、沖田くん、このはらぼて、いったいどうするよ



？」

「どうするよ、と言われても、もう産むしかねエでしょう。たとえ土方さんとの子どもだとしても、できちまったもんはしょうがねエ」  
「なにも好きこのんでマヨ王子の子どもなんかをなア…。こんどはもつといい男を選ぶんですよ、おタマや？」

銀時の胸にやさしく抱かれていい気持ちなのか、“あんにやろめ”はタマと呼ばれてもいい声で返事をする。

「おいおいおい、タマじゃねえよッ！ってか、その直前の話、何ッ！なんで俺の子オオオッ？！いやいや、それよりも俺のわびは無視ですか、無視？なんなんだよ、てめエらはよッ！」

猛る十四郎をいなすかのようになり、銀時が言う。

「いやさ、うちの奥さんが心配してんのよ。椿ちゃんの子猫の貰い手、決まってるのかしらって」

「ああ、産んだはいいが全部が全部、ここで飼えせんもんね」

銀時の言葉に山崎が頷く。そうそう、と総悟も言葉をつなく。

「あつしんとこのも、御新造さんに聞いたって心配してましたっけ。あ、じゃあ、あいつにも一匹引き取ってもらいましょうか」

「お妙さんが、鼠退治用に賢い猫が飼いたいって言ってたぞ、そういえば！」

制服姿のまま、勲も話に加わってくる。

「まあ、万事屋でも一匹くらいなら定春が面倒見てくれるだろうから、もらってやってもいいんだけどオ？それなりの持参金がつけてもらわねエとなア…」

「あ、屯所に鯉節やらなんやらを、納品してくれる魚屋さんにも子猫いらなにかどうかって、聞いてみましようか？」

「お、いいねエ。ザキヤマちゃん、冴えてンじゃねエの？さすが、真選組の懐刀！イよッ！惚れてしまいそうだよッ！」

「またまた万事屋の旦那ア！もう上手いですからね、旦那のおだてときたら！」

あれよあれよ、という間に十四郎が口を挟む間もなく“あんにや

ろめ”の子猫の貰い手候補が決まっていく。

…あ、もしかして。こいつ…ッ？

たぶんあの冬の日、十四郎がある想いを込めて子猫を拾って帰ったことを、銀時もよく知っている。おそらく銀時にとっても、忘れられない日だったのかもしれない。十四郎自身、自分の胸の奥でひそかに育っていた想いに気づき、そしてその想いを伝えることは叶わないことと同時に知ったあの冬の日。そして十四郎のそんなほのかな心の焰の存在に気づきつつ、己の焰の存在を示した銀時。あの日、ふたりは互いの胸の中にある同じ想いの形を探りあった。そして銀時はその想いを叶え、一方十四郎はそれを見守る側になったのだ。

たまたま見つけたなんて言っただけだが、もしかして…ずっと探してくれてイヤがったんだな、こんちくしょうめッ…

総悟や勲らと子猫の貰い手先について興じている銀時の横顔を見ながら、十四郎は力チリと音をたてて煙草に火を点ける。ちりちりと紙巻がかすかに燃える音を聞きながら、深くゆっくりと燃えさしの煙草を吸う。喉の奥から、鼻腔に向かって煙が通り抜け、奥底に隠れていた言葉が引き出されるように、十四郎が銀時に向かって声をかけた。

「おい、万事屋の」

「あア？なんだア？」

「これからなんか用事でもあンのか？」

「あつたら、なんかあンのかよ？」

「あンのか、ねエのか、どっちなんだってンだよッ！」

「ねエよ、ばかやるウー！」

「ねエならねエって、素直にさくさく言いやがれッつのッ！」

「つてか、なんでてめエに俺の予定をいちいち話さなきゃいけないわけエ？おまえは俺のセクレタリー？いやいやすっかりデキる秘書気取りですか、このやろウツ！」

「なんだっていいからよ、しのこの言わねエでこっちついてこいやッ！」

「なにそれ？どういうプレイ？オレ様演出？ちょ、意味わかんねエんだけどオ？」

そう言う銀時の腕をつかみ、そのまま屯所の外に連れ出す十四郎。門から出て数分ほど歩いた頃、銀時がぼそりと言った。

「…ンてめエ、いつまで彼氏掴みしてやがんだよッ」

「あ？悪イ、悪イ…」

そう言つて十四郎が、つかんでいた銀時の腕を離した。

「おう、悪いがちよつと顔貸せや…」

そう言つて細い路地にすたすたと入っていく。不審気な面持ちで銀時がその後をついていく。路地をしばらく歩いていくと、ずいぶん薄汚れた風情の駄菓子屋が見えてきた。店先には近所のこどもたちがたむろし、くじつきの飴をひいたり、小さなくしにささった薄いカツを頬張ったり大騒ぎだ。そんなこどもたちの輪の中に、ひとりの小さな老婆がいた。十四郎の姿に気づき、こどもたちがわあわあと声をあげる。

「トツシーだ！ばあちゃん、マヨ奉行が来た！」

「トツシー、白見つかつたのかよ？つたく、真選組のくせにしょうがねえなア」

「ねえねえトツシー、白ちゃんは？ねえ見つかつた？」

銀時がいようがいまいが、おかまいなしに、こどもたちは十四郎に群がる。

「おい、てめエら！おれがいつからマヨ奉行になつたッ！」と言いながら、十四郎は老婆に近付き耳元で大きな声でゆっくり話す。

「ばばア、猫、戻ってきたぜ？」

十四郎の声に、大きく何度も嬉しそうに老婆がうなずく。

「そうかい、戻ってきたのかい。よかったねえ、これで安心だねえ……」

「こちらの旦那が見つけてくださってな、今日わざわざ連れてきてくれたのよ」

そう言いながら十四郎は、銀時を老婆に指し示した。駄菓子屋の老婆はちよちよこと銀時に近付くと

「ありがとねえ？あの白は、ここいらのこどもたちのだいじな友達なものだから、いなくなつたと聞いて、みんなそりゃあ心配していたんよ？」

でもねえ、あんたさんが見つけてくれたんだってねえ？ありがと  
うねえ」

そう言つて銀時に向かつて手を合わせる。

「ちよ、ちよ、やめてつたら！おい、ばあさん、そんなのやーめてつての！」

銀時が慌てる。そんな銀時の慌てる様子を見ながら、十四郎は勝手にケースから出したのしいかを齧っている。

「おいこらッ！マヨ王子ッ！なんだてめエ、いきなりこんな目にあわせやがつて。どうもこうもねエじゃねエか、このやろウッ！」

やっと老婆の感謝の合掌攻撃から逃れた銀時、文句を言いながらこれまた勝手に別のケースからあんず飴を出してちゅうちゅう吸い出す。

「……っはア、甘くてうめエ……」

「バカか、てめエは……」

「あ？」

「……まア、なんつウか、そんなわけで猫が見つかつて助かつたって訳だ」

「……あつそ。そら、よござんした」

「……こいつらも安心したみてエだし」

「ばばアにも喜んでもらえたし？」

「まアな」

「…あの猫、おめエに拾ってもらってなかったら今頃、おっ死んでいたな」

あんず飴を吸い終わり、今度はきなこ棒を堂々とケースから出して食べ始める銀時。

「生まれてくる子猫のうち一匹は、うちの奥さんが育てるってさ」

「…ん」

「トツシーって名前にしましょうか、って今朝も言ってたよオ？」

「いや、それだけは頼むからやめてくれ、って」

駄菓子屋の店先の壊れかけたベンチに、ふたり並んで腰掛けながら、ぼつりぼつりと会話が続く。

「…もう一年か」

「ああ、あつという間だった」

きなこ棒をもぐもぐ食べながら、銀時が答える。

「てめえの結婚式は、忘れようたって忘れられねエ…」

「…そうか？」

「結婚式当日に、新郎とツルんで泥棒まがいの所業をした挙句、すました顔して式に参列なんぞ普通、ありえねエだろうがよ…」

「まアね…」

「しあわせか？」

「ああ」

「…てめエじゃねエよ」

「だから、たぶん」

「たぶんかよ…ッ」

「だっていくら俺でも、そこまではなア…ねエ？」

「なにが、ねエだよ、気色悪いッ…。まあいい。てめえの顔を見りゃ、見当もつくってmondがな…」

「ふーん…」

そう言いながら、銀時はこんどはあんこ玉をわしづかみにして、もぐもぐと食べ始めた。

「ってか、てめえ、喰いすぎじゃね？そんなん甘いもの喰ってんの

見ると、さすがに気持ち悪いわ、まじで」

「…そオカア？」

ふたりのぼつりぼつりとした会話をよそに、こどもたちはきやあきやあと歓声をあげながら、自分の財布と相談し大好きな駄菓子を買っている。

「あーまア、そういうわけでエ、今回はア特別にイ探しものの代金は口八にしておくからア。そこんとこ、お忘れなくウ！言つとくけど、これ貸しだからア、貸しだかんねッ！」

そう言いながら、イチゴ飴を手にした銀時が立ち上がる。

「はア？つてか、おめエンとこに頼んだ覚えねえし！」

ベンチに座ったまま十四郎が言い返す。

「あ、とりあえずは、だ。子猫生まれたら、連絡すツからよ…」

「ああ、そんじゃな」

「ああ」

銀時が軽く手をあげ、路地から大通りへと遠去かっていく。そんな後姿を見送りながら、煙草をくわえ火を点けようとした時、秋風がすつと吹き抜けた。

「あ、なんかいいにおいがした！」

「あたし、これなんのにおいか知ってる！」

「なんのにおいー？」

「これはねえ…」

「金木犀だろ？」

煙草をくわえた十四郎がいつのまにかこどもたちの傍らに立っていた。そうして、もういちど花の名を繰り返した。

「金木犀って花の香りだろ？」

風に吹かれ、ゆらいだ煙草の煙が、一瞬目にしみた。

来年の今頃もきつと、こうしてンだろうなア…たぶん

そんな十四郎の煙草の煙をかき消すかのように、もういちど風が

吹く。前よりも強く、一層強く金木犀の香りが漂う…

おしまい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3619o/>

---

天高く、かぐわしきは金木犀～十四郎紫煙綴～

2010年10月17日19時40分発行